





3  
1368  
8

環海異聞卷之七

人皮亞里越身十二

アリス心 時人、故郷の西人、(或)研の西人、

カモチ作、(或)カモチ作、(或)カモチ作、

カモチ作、(或)カモチ作、(或)カモチ作、

カモチ作、(或)カモチ作、(或)カモチ作、

カモチ作、(或)カモチ作、(或)カモチ作、





環海異聞卷之七



尺度並里程第十二

アリミン

は尺に彼邦の寸尺

我邦の寸尺三寸  
程あり

か移り作りなる物ありて、商店に供ふは

アリミンに之を合せたる尺を

サミン

とらふ木を作る工マイク匠に法ふこと

を後ふなり、け方の曲尺を合せたるあり





七尺あり。彼邦はアリシをすかふしむるを

ポアリシ とりよ ポハ半と いふも 四ツ一ふ志るる人を

ゼヒルト といふあり

曲マカとく結マカあてめは作マカ

さるりの也

右サシ は方の七尺といふ尺と百合せるが「ウーロス」

彼一里 なり は方の 松を丁をりといふゆ

邦内道舟を里毎に控杭建てあり寛政

初年松前を先史等を伴ひ来りし後

の内イロシへリプイチと日本人の行き今

彼邦捨地の役と為む日本の一里といふを

能く松前のるを間を抄試しふオロシアの

三里半の内少しぬると源流人たふ徳りし

附

間 ハカ 古帝兵唐皇富オロシアの里法を和る  
天文書に説くを以て考る説



アリミン

彼邦 我方曲尺 肆尺 叁寸 陸分 伍厘

ポアリミン

彼邦 我方曲尺 肆尺 肆寸 捌分 肆厘 伍毛

ゼウエル

彼邦 我方曲尺 伍寸 九分 壹厘 肆毛 伍絲

サゼン

彼邦 我方曲尺 七尺 〇九分 伍厘

ヨールス

彼邦 我方曲尺 九町 八分 伍厘 四一七

茂葉 丙寅 初秋 彌氏 と 司天 蓋の 級宅 也 宿

光 丈 丈 束 了 合 せ り 禮 儀 け り 不 及 ぶ 光 丈 丈 日

彼 六 尺 一 寸 餘 サゼン 七 尺 零 八 分 當 り

は サゼン 五 百 合 せ せ 彼 壹 里 ヨールス 千 一 百 一 十 一

仙 臺 澤 宮 一 町 八 分 の 邊 以 あり 且 尺

の 名 サゼン 一 里 の 名 ヨールス と 稍 古 遠 也 けり

然 光 丈 丈 臆 記 する 系 的 傳 承 不 可 申

は 光 丈 丈 臆 記 する 系 的 傳 承 不 可 申

委 せ 等 計 一 試 む 事 有 サゼン 我 曲 尺 あり 七 尺 零 八 分

五 百 合 せ せ れ 三 千 五 百 四 拾 尺 四 丈 二 百 五 十 一

此 我 方 の 九 町 八 分 三 分 三 厘 也 我



邦の千里ハ斗千百六十乃中々方斗千  
九百六十尺なり依て合考する事

魯西無の三里六々々日本の千里あり

同 十里ハ 同斗里七三二四八一五

同 百里ハ 同斗拾七里二一四八

同 千里ハ 同斗百七拾二里一四八

同 萬里ハ 同斗千七百二十三里四八

本編中彼里數を記せざるものハ此算法ハ合

せ考へ急ぎ

和算書載する所と又仙臺源より  
是(東)の始り所

和仙臺源客等りのイルコーツカより新都ペートル

ブルカをハ彼里數七千里ありと古算法に従ハ

我 邦の千九百拾斗里。之六なり

源客等曰け七千里 セームテイテツガ 古國人

通一千里あり客ハ六千七百里あり公用ハ

て往來をハ六千七百里の點を拂ひおれ

をより高着の通一七千里なり



先年光を更う紀實とて見ゆふ五千八百廿三里と  
あり一書ふは五千九百八十斗里とあり 古語の  
付書の  
後 後 付 付 由 由 子 子 光 光 を を 更 更 小 小 算 算 する する 事 事 あり あり  
能 能 小 小 算 算 する する 事 事 の の あり あり 付 付 方 方 の の 里 里 数 数 晴 晴 能 能 せ せ ず  
ソラニヲホス  
併 併 序 序 の の 能 能 する する 事 事 あり あり 皆 皆 是 是 并 并 一 一 里 里 毎 毎 小 小 算 算 計  
せ せ 方 方 の の あり あり 後 後 方 方 の の あり あり 付 付 方 方 必 必 是 是 六 六 七  
十 十 とい い 小 小 算 算 子 子 あり あり 事 事 あり あり 事 事 あり あり 事 事 あり あり 事 事 あり あり  
あり あり あり あり

光を更う紀實の力にニヤーツカより新数へ  
トルプルカをハ彼里数めて是万斗子之百  
之極を里よりとて事 これに大略を  
いふのこゝ 減 減 小 小 我 我  
邦 邦 の の 里 里 数 数 小 小 政 政 算 算 一 一 見 見 れ れ 三 三 千 千 三 三 百 百  
六 六 十 十 八 八 里 里 是 是 九 九 十 十 あり あり  
考 考 使 使 并 并 算 算 する する 事 事 あり あり 有 有 事 事 あり あり 事 事 あり あり 事 事 あり あり  
中 中 領 領 地 地 圖 圖 小 小 天 天 度 度 事 事 あり あり 付 付 方 方 あり あり 物 物 あり あり



披きて新嘉坡より ペトルブルカカミシヤーツカをこり

東西直徑を測るに多ふは方の里數ありて

斗千斗百斗十八里也

按嘉坡其國ノ長サ東西二百七十餘度及ブトアリテ度我

廿八里斗分斗拾八里七町拾斗間

往きの高低屈曲も多しあるは四千有餘

里も一町多し然南北も亦數百里と云ふれは往

玉返寒の氣候不毛の地多しといふも其地

ヒノキヒキ

あす所の州郡定ふ世界第一の鉅邦といふ

タイコク

### 秤量第十三

法馬 フントウ

分銅也

とベチメシといふ

物ヲカクル

コニ輪金ヲツケオク

衡ハ金ニテ作ル如此ギホウシラ  
サホニツケタル物ナリ

手把ルハ多ナリ  
ハ糸ハおの輕重ニ  
ヨク自由ニ進退スル  
ヤウニス

フンド 九拾六匁の法馬ありて彼を百匁と云ふ



は九粒六文の一ツをゾロジニカといふ吊られを  
九十六合すれハ「フンド」とある也

ブート 我方 四角目 志志更ハ四角目格五文といふ

釘ナギリハ四角目かき又ハ内よりこれより下ヒタ

かきもあり大なる物ハ何粒数多といふ

大量をかき物もあり 妻ウメききりハ更せす

升斗マスといふ物ハ更下を臺物多し月買ふす所

諸忌カガリ秤ハカリありさけ臺買をある也

樂器第十四

琴 ゴウシケ 絲ハ鉄のよりこう糸なり生糸綸也

銅カネも有り四十弦なり

笛 ドウチカ 継笛なり片ざりハ銀の輪とあり

取トり 是合そ物く管も多しハ生糸

胡弓 ケレプロ 胴の方とたらの缺多骨の下あり

うけてすうありは  
肩下胸の上を不接する  
七骨のよりあり

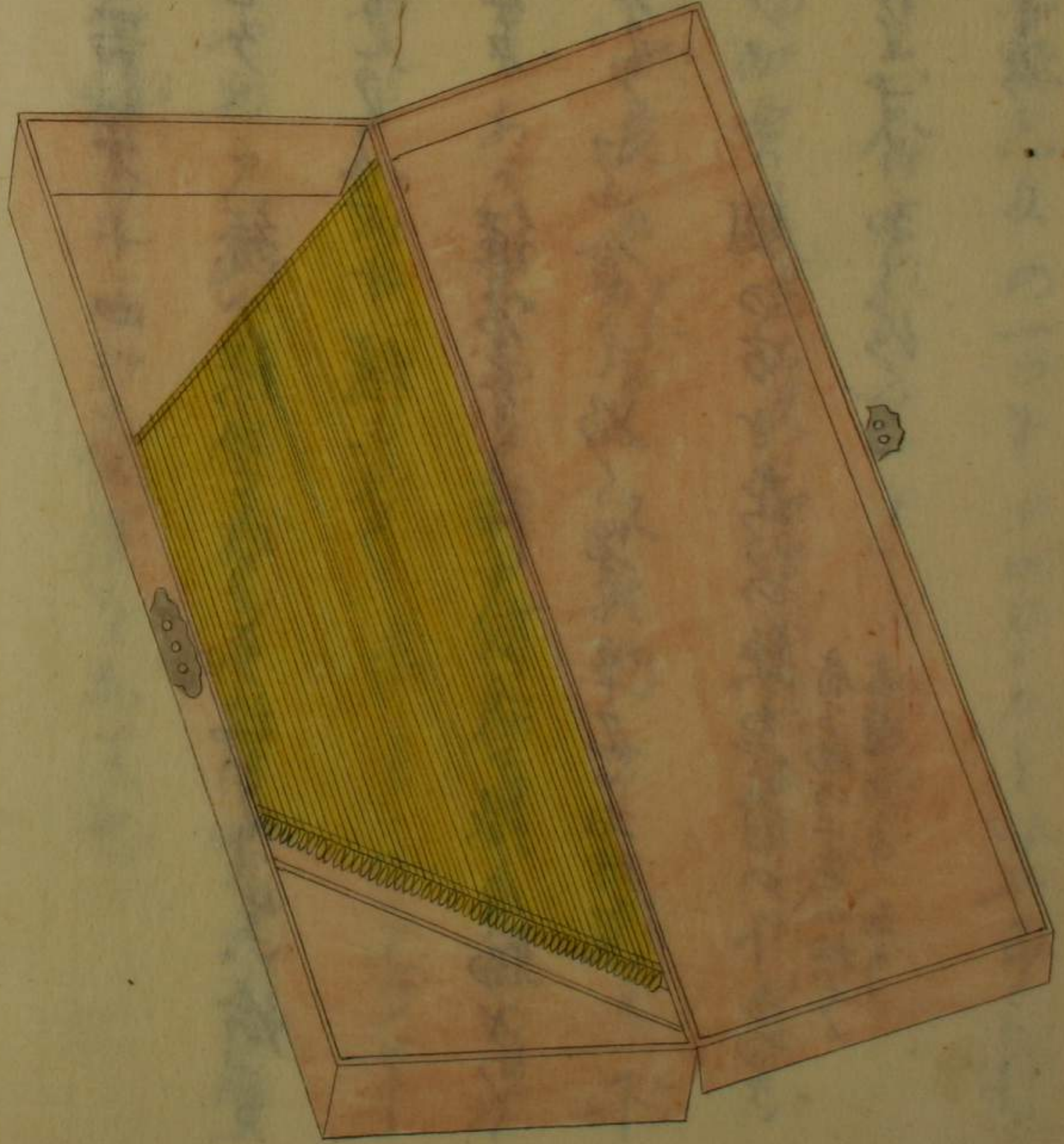
三弦 パライカ



ケレプコ



ドウ子カ

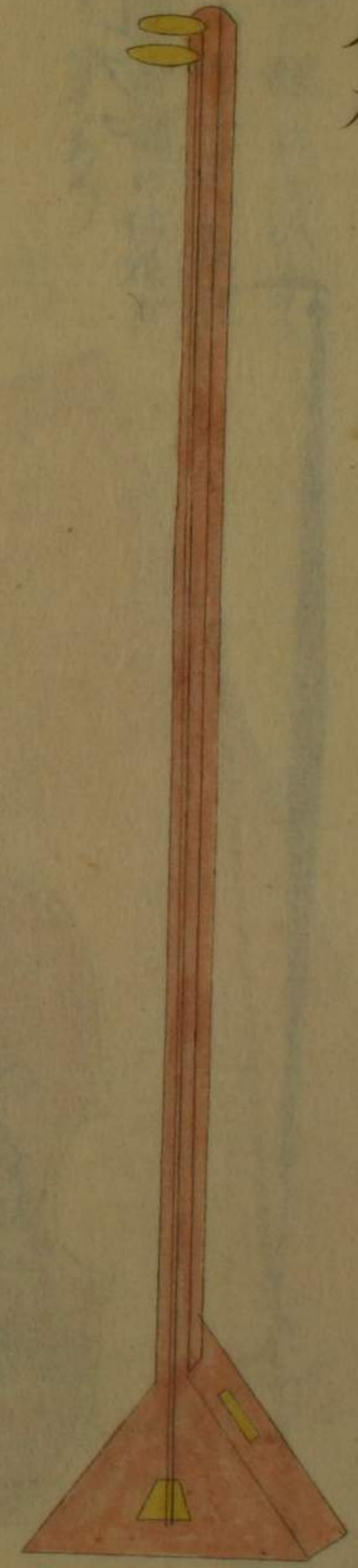


ゴーシケ

蓋ハ蝶はくひち  
 かぶせしき蓋乃  
 裏ふ曲調の仕振が  
 そろ付てあり



バライカ



大鼓

バラバン

又長サ斗尺をとりて先<sup>キ</sup>圓く割<sup>キ</sup>中の方<sup>ニ</sup>旋回

吹<sup>キ</sup>のあり<sup>キ</sup>名<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>覚<sup>ス</sup> 按<sup>キ</sup>お<sup>キ</sup>和<sup>ス</sup>あ<sup>キ</sup>ふ<sup>キ</sup>し<sup>キ</sup>ト<sup>キ</sup>ロ<sup>キ</sup>ム<sup>キ</sup>ベ<sup>キ</sup>ツ<sup>キ</sup>ト<sup>キ</sup> <sup>キ</sup>あ<sup>キ</sup>ろ<sup>キ</sup>ろ<sup>キ</sup>

は解<sup>キ</sup>樂<sup>キ</sup>器<sup>キ</sup>い<sup>キ</sup>ろ<sup>キ</sup>あ<sup>キ</sup>ろ<sup>キ</sup>強<sup>キ</sup>を<sup>キ</sup>さ<sup>キ</sup>ふ<sup>キ</sup>見<sup>キ</sup>る<sup>キ</sup>を<sup>キ</sup>

ふ<sup>キ</sup>れ<sup>キ</sup>の器<sup>キ</sup>宴<sup>キ</sup>饗<sup>キ</sup>あ<sup>キ</sup>の<sup>キ</sup>時<sup>キ</sup>用<sup>キ</sup>申<sup>キ</sup>都<sup>キ</sup>府<sup>キ</sup> ミヤコ <sup>キ</sup>あ<sup>キ</sup>ろ<sup>キ</sup>

雜<sup>キ</sup>劇<sup>キ</sup>と<sup>キ</sup>ん<sup>キ</sup>ろ<sup>キ</sup>ふ<sup>キ</sup>ち<sup>キ</sup>は<sup>キ</sup>樂<sup>キ</sup>器<sup>キ</sup>を<sup>キ</sup>以<sup>キ</sup>て<sup>キ</sup>合<sup>キ</sup>奏<sup>キ</sup>す

樂<sup>キ</sup>人<sup>キ</sup>舞<sup>キ</sup>臺<sup>キ</sup>の<sup>キ</sup>前<sup>キ</sup>に<sup>キ</sup>並<sup>キ</sup>居<sup>キ</sup>て<sup>キ</sup>存<sup>キ</sup>を<sup>キ</sup>こ<sup>キ</sup>め<sup>キ</sup>て<sup>キ</sup>戲<sup>キ</sup>子<sup>キ</sup> ミタカタ オングタイ ヤクシヤ

舞<sup>キ</sup>蹈<sup>キ</sup> キヤウゲン <sup>キ</sup>あ<sup>キ</sup>ろ<sup>キ</sup>



氣令第十五

此篇は於てはるるのち地きよありて従事するものあり  
ふふあはけて裁する説もなき也

耕農第十六

田ハたゞく畠のこゝなり地を十<sup>犁</sup>手て麦類を穀し  
みし<sup>コヤシ</sup>糞土を利する事ありし菜蔬とては同し九十月  
の原河氷の上をて麦類をたふあする等此篇  
ふ出せらるる如く他は録すべきものありし

交易第十七

此篇は穀しりて取裁はるものありしは玉取より  
て高法を不等の事詳細あるものあり

醫療第十八

内科をドクトル 和名も  
同き也 外科をレーカーと云ふ同  
伴の者とも一年一度病を煩ふとき 醫師を  
て診脈し何れも一白粉薬を一例に與ふ事  
療治中亦子も尺舞もなり 始終轉方もなき



振ふ是申候平。瘧瘧を病む時瘧へ常の瘧を  
 ゆへせり薬、此と大熱ふくく大便秘結せ  
 し。肛門より水銳ミツテツホウきて薬水を注射ツキコムせぬとあ  
 通しつゝよりけ解、何れも病みさるゝあつし  
 取後薬せよりき醫家も候きんふゆしゝるゝ  
 一ふ葷筍のめき物も抽斗ヒキダシあり、此月ふフラスコ  
 入の水薬つり、何をもえり又其の脱着せ  
 病人を鋸ノコギリきて以き切り療治せ、「ヤコーツカ」

ありえり、此外他亦あても醫療のりえあす  
 有る薬の振子も見せせ、病も何れも病  
 あるの薬、知すツンガといふ病、多き振子  
 なり新事の振ふ流く、一とせちる候病の流しせ、  
 何れも

物産第十九

動物

魚

アレハ

鱈サケ

ケツタ

鱒

ゴロホーニヤ







ま〜あそ 菓多之 考付の 塩漬や〜て 送多なり  
有果等 バイカル 湖の 漁獲物 行季  
考付の 信いふ 証を

オ、クニヨ 形石首魚イニモナの ぬし 但 腹ラ 石卵し 七寸

より 斗尺 五寸 信やそ あり 肉白し 又 ことき

方なり け魚ハ 夥く 可なり 大之種 ガーモリーヨ 昂  
ハイカル 湖 小産 多

ハーロス あいふめ 仙臺の方 之の ぬき 魚也 近き 川を  
イルフツカ

夥く 漁多 揚ヶ 鍋  
あそ 煮 介らふ

タイメン 頭鯽の ぬく 全身 白し 肉も 白く 味美也

ナレマ 泥鰌の ぬく ぬ〜て 體ぬり〜す 但 鱗がし

大魚 ぬ〜て 之 貴 目 珍 なり

カラシ 鮒 近在 川 ぶ 下 あり

鰻 モーハ 蚊 カモル 虱 オ、ヒ  
大老フセイ

蚕 ブーカ 蟻 蚯 蚓  
大老オ、ヒ

蜘蛛 蜂 蜜 ミョート



蛇 ジニヤア  
ジミヤ

蝶 ツスノーフ

鳥 ビツゼイツ

鴉 カニガラ 雀

鶏 雄 バイトウカ  
雌 コーレツ

凡テ雄鳥ヲ バイトウカといふ

卵 ヤエツザ

燕 ツパタ

夏の月を合せて巣をつは方月し

鷹 バグーシ  
ブーシ

三四月の百何日ある時ハ何月といふ

子を煮るも人食ふ畜以て煮て夥くあり煮  
焼きして食料とす 飲食の終ふ詳す

鷺 オートチカ  
オットチカ

畜以て置きて食料とす

雉 ガロハライ

大リ存の如し雌とせしといふ

鳩 ガロフ

食料とす

からんき インデイツケ コーレツ 又 インデイカ

けきハもやより畜をより上等の人の食料と  
すけより以下の人の婚禮等のとき宴集の時  
のこけきハケセロフハちかハ四五十も畜してある  
按ふインデイツケ、ローレツハ印度雞の義ある



鷹トビ 尾のきき鳥 名ふす

鷹トビ 尾のきき鳥 名ふす

鷹トビ 尾のきき鳥 名ふす

鷹トビ 尾のきき鳥 名ふす

鷹トビ 尾のきき鳥 名ふす

鷹トビ 尾のきき鳥 名ふす

鷹

鷹トビ 尾のきき鳥 名ふす

鷹トビ 尾のきき鳥 名ふす

ソーパー

ソーパー 好とする物なり 殊ふハイカル湖の色こめて

ソーパー 好とする物なり 殊ふハイカル湖の色こめて

ソーパー 好とする物なり 殊ふハイカル湖の色こめて

ソーパー 好とする物なり 殊ふハイカル湖の色こめて

ソーパー 好とする物なり 殊ふハイカル湖の色こめて

ソーパー 好とする物なり 殊ふハイカル湖の色こめて



至て柔らやしてら川このやし腹の筋は赤色  
 たり其の怖きす、マカヒルツメ 鈎爪あり面髯猫の如く  
 黒色體毛チ猫の胸のひもろうぶとくし中等  
 以上の人の衣被子用ゆ是皮を縫合せるも  
 其投儀平換束好色賭者黒ともいふ也し

大物種は其の形状よりして新小図解

作し是と云ふは彼亦其時記はるべきを以て

是正之如し依り印子に圖状とあるはたの如し

タミシ

ソーパーリ貂圖





按ふソ、ホリ、其貂鼠をり漢土北邊諸國の  
産物多し其諸書ふん、古來は皮を以て裘を  
出さるゆゑ、貂不足、後以狗尾等の諸毛を  
和らふ、これとサーヘルと、其獸獲ふ國  
徑あり、又北韃、止白里地方の事を記載せり  
書中ふ、其詳細を考せり、次ふ天工開物に  
載せり、其を抄し、又小野蘭山の所記と附  
して参考の了とす

天

天工開物、貂産遼東外徼建州地、及朝鮮國、其  
鼠好食松子、夷人夜伺樹下、屏息悄聲、而射取  
之、一貂之皮、不盈尺、積六十餘貂、僅成一裘、服  
貂裘者、立風雪中、更暖于宇下、眯入目中、拭之  
即出、所以貴也、色有三種、一白者、白銀貂、一純  
黑、一黠黃色、而毛長者、近慎、一帽套、已五十金、

貂鼠 唐物異名 蒙古呼曰不魯還朝鮮トツヒ 朝鮮賦 獾

其裘舶來アリ裏面ヲ見レハ至小ノ皮マテモ繼



合セ製ス毛柔軟ニメ白色コレハ銀貂ナリ紫貂

ノ皮ヲ帽縁ニ造リタモノ船未アリ裘帽風領ヲ

レナリ帽縁及裘領ニ用ユレハ寒風ヲ防クト云

猫

フーシカ 尾長短二種モニガリ蒙古の土産なりと

いふ猫の毛をとりてス〜ふ甚大か〜てむいぬ

の如し玉て珍奇の物とせり

鼠

ヌイシ

犬

ソバカ 日本ノの如き物あり又身長く面の

豚

長きもつり又下腹きれあがりて大なるあり

シユシヤ 毛黒或白又斑毛もあり子所の豚

の卵ハ皆ナシ卵丸と去り高くて食料とす卵丸

と去り善くありの内肥て味も美なり

牛

コロワ 牝牝貝イゴラ

毛色ハ種々ありは物も〜日

用の食料とす

馬

コーニ 牝牝コーニ 牝牝カオラ

といふ日本ハ皆多きなり〜又

るの卵ハ皆卵丸と取り去るなり如きれ



かんはらうきききをかけても子師を又小鼻  
ときききおれ息ときぬあふあすといふ  
飼料の雑草をうりや田野中子飼場を  
土と銀の持場ちりて惣田ちり子生養  
すれに不残前をてて干し置き各月の飼  
料とすこ<sup>ニバン</sup>度生<sup>ハ</sup>の子生しむる時を度中ふ  
敷足のるを放ちて<sup>ホシイマ</sup>縦ふ合をてて水川  
ひきつきて飲しむるををり

羊

バラニ 毛色黒白又斑もありちきき毛を  
前<sup>ツリ</sup>にほかせ綿の如くあるれといて羅  
紗類の毛織と織る又皮を丸むきふても  
高貴すを板の價甚貴し

綿羊

ヤマニ 毛長くして<sup>ソラミン</sup>葉叢を忌むる如し  
は毛を所りたき糸ふたり麻布を織る又あし  
皮とて種々の用ゆ上品なり併毛皮の羊  
前<sup>ツリ</sup>をすむるのヤマニ 綿羊の皮武百ある



ハラニ 羊の皮は五万也

野牛<sup>ヤギ</sup>

コジヨウ 羊ふ似たりは草、他の皮もよくして良

好也世ふらるる也や皮といふ類の物は是あり

木鼠

ビヨフ

兔

オレカ

皮は衣服とす、至て暖みありのこ此

物魚西無人の食料とあす、凡テ獸類犬猫の是

海のものも食を以て兎も猫の如くあれ也

併ヤコーテ、ブラーツツハ食料也あすこ

鹿

オレニ 皮を剥き用ゆ草も作るトニコスハ馬

の如く使ひ草を鬻ぎて棄り糸をといふ又乳

汁をとめて牛乳の如く用ゆ毛色も色々の種

類ありあや色厚く、斑ありあや皮とも又あや

梅ふ一種馴鹿はよといふ所のは地方もあるといふなり  
大鹿は四方の等し鹿彼方あかし角ひくめあすオレニと  
いふもの、は方の鹿と遠い角ふハイあく毛短く皮厚く  
至る角白くくめきて白犀角の如く又牛角似たり大鹿尺餘也

野猪

名ふ覚 毛を剥きて食料とす  
大鹿 シビニアン

猿

サニガ 尾長猿なり 猴<sup>サ</sup>猴<sup>ル</sup>ハ是也す



熊 ミナウエチ 毛色黒又淡赤 羅 種あり

尾 ホー

海獺 コージキ オニデレイツケへオストロロの海中にて多く捕すを云ふ

海豹 ネルバ

獾虎 ポフロフ

駝 名ふ少 頂のふみ痛あり 起すも色赤ふ 灰色あり 大走ベルカウタ 足中イルコーツカの後歩ふ 足中細直ふを云ふ

梅子 駝 あり

象 スロン ベトルブルカ 都府 ミヤコ の町屋のうちふ畜

置事を見ふり 四百四方程の赤なり 高八尺鼻を伸せ 長六尺 尾ををろ 牙は 挽き切ると 入て 以て 口六寸 斗り 狭きなり 四肢を鉄のくさり ありて 軽き 重なり け 敷るの 横板とも 鼻ありて 巻き つけり

鬼 シヤフ は方ありて 画す ありて ぬき 図をかき けし 船の 舟形を つけし マルケイス 山の人を さし ぞ セイカといひし され 鬼人 あり なるの 住



植物 ..

松

名も松

立延るものあり 鱗皮をなす

ハイヒロカシ

五葉松 スノコウ

材木、薪、棺材、葉はよく火に燃ゆる

やくなまり

炭 オゴロ

松實 オシヒ 菓子

みゆい油も志あり つまみ 黧皮あり

番瀝青 チヤン

松根と煎じて水に溶かす ゼリツノ木

マースラ 脂

スモロー

とろみ水も合れる 葉

みちごも

レイシニシノ

富士松 小似るものあり 黧皮あり 堅

木を切り削りて 漆を塗りて 以て 漆れしものあり

ふしの松 檜をたのめく 立延るものあり

ケトロライ

松をのめき 松を切り 葉を多く 附て 大なり

一掃り 松あり 能く 延るものあり 葉は 油も 志あり

司る也

大葉松 カシワ

タグ

常のおとろきをなす 五葉の松の如く

立のびる也 又 タグとて 我も 志あり 葉も



呼以網アミをミ深る木不同ミき物あり才

ホーツカよりイルコーツカカの及申ミるし

大木もカ申ミ柁カをミふ使用ミを

櫻

ベレツウ  
ベリョーグ

大木あり花のさるぬ山桜を國中野

るるミて諸材木ミ新等ミふ用ミゆ

樟シスノキ カノハル 他ミよりミ木ミるミはし葉ミをミふミ蟲

のつらミるミあふ入ミるミをミり樟腦カスハといふ

カラスナホゼリホ 改帳ミの序ミ亞墨利加メリカ あり

檣ホハミラ 小ミ求ミめしミ木ミをミり又ミこミれミふミ他ミるミ異ミ木

ありミ質ミ堅ミくミ画ミて良材ミとミえミゆるミものミをミはミ地

よりミ求ミめミ木ミをミりミ木ミ後ミ忌ミの上ミろミくミ後ミふミ作ミり

は切端ミをミ使ミ序ミふミ新ミのミ業ミ以ミてミ日本ミ人ミふ

作ミるミりミしミうミ終ミ失ミせミり

竹カメーニ 是地竹ミのミ文ミふミをミしミ他邦ミより

来る乾竹ミあるミのミをミりミ都府ミふミムスカーモリ

といふて諸國の産物とミ衆ミるミふミりミはミあり



長さ丈二之尺の大竹ありしを又より而て  
珍物とすす極きなりは皮の厚きも長  
崎等穀の上<sup>アホナマメケ</sup>喜生竹類中載せしむる

穀蔬菜果

米

<sup>ビナ</sup> 他邦より来る多し南アメリカより

海より<sup>ミナ</sup> 轉げて送るなり

豆

ゴロフ

大麥

エチメン

麥稈<sup>カラ</sup>

ソロモ

裸麥<sup>ハタカムキ</sup>

エリゼノ

蒸餅ふ志るをケレプといひて

常食となす也

小麦

セミイシノ

菜菔

ライジカ

蕪

ライバ

蕎麥

ゲレシヨウシノ

挽割ふして蕎麥粥とす

及中用となすこれ煮くやんき飯といふ



他の麦類より「便斗錢 細錢」にも煮し

挽割 コロパ 粉 ムツカ 根 コレニ 莖 シケナ

### 麻仁

麻 <sup>コノピロ</sup> セーミヨー

セーミヨーレハ煮て種子の身をいよ人乃の種  
といふもセーミヨーレといふは細令日本人  
のふれといふをニツポンツケセーミヨーレと  
いふ 麻草<sup>コノピロ</sup>一種の皮を晒しよして  
白をふりぬる也

### 芥子

ゴロゼツサ

### 葱

ロツフ

### 大蒜

ツスノーコ

### 茸類

初茸 雜松茸 白初茸 志の類

皆食ふ可し 腐もふし ぬるも  
等も何れも名居 不安あれは食料とせず凡  
茸類五月か七月迄を採り食ふ大抵  
埃漬かして用ゆ生きて用ひ細く裂き



挽割麦に魚を煮出し塩を加へ草を入  
煮食す

蕨

名ふ覚 山ふけを食料とせし源中記に  
これと接り日本でも食せらるる接り各終らる  
が彼玉の人を馬のたぐひをとりて焼く  
食ひふかし

ヤーボルキ 一種の茅 漢書に我 邦の

よし茅の色を等し丸きいもをり いせ乾

物にし菓子を作る又粉と煎製ふりか  
く各篇ふ載す

西瓜 アルボース

瓢 タニ 南アメリカに多く見ゆ

番椒 トウガラシ ベイレツ 唐山ケタイツケよりの交易物ふ

束なる乾し葉し葉入し葉なる葉の  
上ふ漢字あり 福帆の序南アメリカの  
エカテリナにては物束ふをりてふらのび



とろりめをえり

胡椒

コロギシノ園  
パイミツス  
アスタラカンツケ  
地名  
ブーレツ

他邦より来る

数量第二

- 一 オゼン
- 二 ドウ
- 三 テレ
- 四 ナヤテイ
- 五 ビヤアジ
- 六 セイシ
- 七 セイム
- 八 オラセム
- 九 ゼイウエチ
- 十 ゼイセツ
- 十一 オゼンナツサイ
- 十二 ドーウエ ナツサイ
- 十三 テレナツサイ
- 十四 ナヤテレナツサイ
- 十五 ビヤダナツサイ
- 十六 セシナツサイ
- 十七 セムナツサイ
- 十八 オ、セムナツサイ



十九 セイウエナツサイ

廿 ドウツナツサイ

廿一 ドウツサイオゼン

三十 テレツサイ

四十 ソーロケ

五十 ペツシミヤツ

六十 セツレダツ

七十 セムテシヤツ

八十 オ、セムテシヤツ

九十 セタノスト

百 スド

千 ライセツサ

萬 ゼイセツ テイセツサ

貳萬 ドウツサイ テイセツサ

土俗風習第廿一

婦人おて乳を何〜をきす常ふ上體を低くをり  
有ふ妙婦〜し〜も是文〜のな〜し日本通詞役  
トコロコフ〜の嘉ふあ〜し〜付〜其妻、初生の思ふぬく  
め〜し〜あ〜て娘〜て〜え〜ふ〜り〜た

按ふ阿婆地地方固より太のあ〜と〜し〜はあ  
諸至深剣せ〜老たの信と空〜のあ〜ふ  
唐山、廣東、安南等も亦かくの如〜し〜也



土人多く五六十歳まで、初て妻と愛するより  
られ此後、志何るもの、大に何をいつの如  
く名をきき、肉の家の累ひを求めずといふ娘  
子なり五六十歳まで事を<sup>ワツラ</sup>濟<sup>ナシ</sup>むる上りて已ま  
より十五六より十七八又廿歳をよりも遠くより  
妻をもりあり

彼も人の寿命、同じりなれども申か、九十  
歳万歳少ぬる人い、も申七八十以上より

人を老人スタラといふと、五六十歳の人、老者とを  
いふは、年數を、初て室を有つと、たよりあ  
り、は、齡の人、の妻女、五、六、七、八、九、十、の、年、を、  
又、文、也

七十、八十、九十、といふ人、腰の屈、を、起、す、る、者、遠、く、を、  
す、五、六、十、年、を、い、ふ、男、は、室、を、有、つ、と、持、ち、又、大、芥、を、推、  
へ、て、遠、山、へ、推、し、ゆ、り、ゆ、り、と、日、彼、人、を、色、の、骨、折、  
仕、業、し、て、も、は、た、め、不、堪、痛、心、な、り、い、ひ、を、受、け、



梅小年少き月カシツカの室と有るや友不措氣カシツカ自ら

充實せむゆセウブツかく強健セウブツありや

男女交會サイアイの事過度サイアイいもせよりよるサイアイきサイアイあふあサイアイき

又きく久トムくトム候トムもトム何トムとトム留帆トムのトム船中トムをトムもトム輕

水丈ユル並ユルのユル級人ユルよりユル免符ユルしユルてユル舟ユルとユルかけユルゆユルりユルしユルコツユルへユルこ

ハユルガユルマルケイスユルのユルあユルあユルてユル女ユル人とユル樂ユルしユルあユルあユルたユルの

旅ユルをユルるユル友ユル水ユルをユルもユル甚ユルとユルあユルりユルてユル日ユル中ユル長ユル崎ユルのユル淺ユルくユル長ユル一ユルあユルい

逗留ユルもユル長ユルかユルきユルしユルしユル地ユルのユル土ユル奈ユル女ユル求ユルめユル樂ユルまユルんユルてユル各

彼ユル七ユル尺ユルのユル指ユルふユル本ユル玉ユル銅ユル鈔ユルをユル圖ユルとユル修ユルへユル生ユル好ユルりユル然ユルれユル也

此ユル之ユル般ユルのユル嚴ユルをユルりユル世ユルのユル少ユル知ユルるユル通ユルつユルのユルゆユルりユルをユル中ユルをユルれユルら

のユル事ユルふユル及ユルあユルきユルやユルもユルなユルくユル空ユルくユル持ユルつユルるユル也ユルや

土ユル人ユル高ユルふユルありユルてユル閑ユル暇ユルをユル多ユル付ユルいユル宣ユル中ユルとユル閑ユル歩ユル道ユル遠ユルし

てユル往ユル來ユル教ユル十ユル遍ユル千ユルをユルりユル用ユルゆユルりユルなユルくユルしユルてユル往ユル來ユル椅ユル子ユルあユルい

うユルらユルしユルてユル飛ユル多ユルゆユルあユルしユル似ユル合ユルありユルてユルもユル輕ユル時ユルのユル乃ユルをユルり

梅ユル小ユル養ユル生ユルのユル為ユルふユル身ユル體ユルをユル運ユル動ユルすユルるユル友ユルをユル長ユルし

何ユルもユル是ユル宛ユル人ユル持ユル常ユルりユルくユルかユルくユルすユルるユルしユルしユルたユルまユルしユルをユルと



ワシデレニトヒ遊行回々トヒ氣之通回の  
業これと業人百ヒヤンアヒと云々トヒ也

中等より以上の婦人老少と云ふす丈夫なれ女子  
尤もめて男子なれハ再嫁せず尼となりて多ク  
剃髮ハ尼寺ハトヒスヒライハハヒ弱ヒめても男也  
阿れハ後家と云々ハ生也と見え立て家後す道

凡そ女子婚嫁あり内々サケカミ授髮なり五六十ヒ年ヒ成  
ても同く指なり凡そ娘子の事ハセイフカトヒ云ヒ云ヒ

さげ髪なりけ有子老婦となりてもやまら人ハセイ  
フカト呼ぶなり女子身持ハヒまヒのヒて淫行ある  
又且輕振の輕き杖持人の娘をヒソカ私ヒおヒ土ヒ妓ヒよヒの  
不業ヒハヒありヒこれハ人々要るヒとせすヒ有ヒふヒ事ヒと  
辛ヒねヒても中ヒ誰ヒセイフカヒの姿ヒをヒさヒけヒらヒめてヒ弄ヒるヒなり  
尤の姿の女人ハ人々目とつヒるヒ有ヒりヒ取ヒらヒるヒもヒ  
縊死の類ヒ凡そ自害ヒハヒ死ヒせヒるヒものハ佛罰ヒイヒカヒトヒ云ヒ  
是ヒ等ヒ山ヒ中ヒとヒつヒれヒの者ヒなりヒトヒハヒ屍ヒとヒ車ヒハヒ載ヒせ



市中之素廻しに上りて所捨のまゝ葬りて  
寺の引替の文をよむとほむイルコーツカ返る中は  
引上しをたまふをいふなり

大富商ケセロフの家并某高向きの番匠にて  
ヤッーツカ、オホーツカをさへまゝに並らる身  
持放埒の作業は有りて足ケセロフ方と算  
相もくすやあはれりて後私ふ極死せりこれ  
圓モトより大法お新をさす事あるふ富高の勢

あれ、内々の所縁出来ぬとて、病死ふせり  
あせし振きなりいつくの地も金次第のふりやと

いなり

煙草の男女老弱とてあはれり後すまふあはれすまはれ  
おのむ人なり上等の人、時々煙草の元樂しむる  
振子なり煙草の金石本磁器振子ありあはれをかん  
ザといふ煙草あはれ物とて、トロプロといふ報をて作  
あはれとてふりたはふあはれ人を信用する、いふは但



海上渡世する人多く吃烟するはれツツガ 搦小青 腿丹疔

といふ病と云ふ といふ病を坊くあるなりといふ止白里地方の レボリ

種族ヤマーテブラーツケハあるこれを好み後すこか

ホ管なり

漂客等何れも煙草を好む嗜すは土産の

葉をそのを求め銀とすきりて刻む後きり

土他の人々たつめくある處を至り臭し

といひ或はけむりといひて癖にいとひかれ甚

のこみくもき 追々揚り立店より住居せし時

を他は保ちゆをられ各々小俵のこつとをかり

土人其れを是をてちお朝り笑ひあかり

おまぬおのこみしりり

嗅煙草 カキタバコ 臭烟 カキタバコ といふ事ありこれ乾煙の粗末ありし

ころ物とふふ撮る鼻より嗅くをなりこれ邪氣の

外襲を除く為と吹ゆこれ人々すろりなり

烟末を貯る器形即因入のめをわくは細工精粗



持るありきるやをダハケリーリカといふ 持る和菓ふスノイフ  
タバコドースとといふ

女人の籠て吃烟せむ但ち喫煙子老婦をとい

まれ〜用方ものより喫て淨と卒し鼻拭 ハナ  
ナギ

拭て居とれく文 ちより

梅ふ歐羅巴洲を何れのもちて婦人吃

烟いせむと和菓人いひ〜

女子遠左の若の糸紅粉とも糖ふ男女髪ふ

油とつ草をりボマタといふすき油のめ〜何て

製する物うき〜は少〜様髪臭〜油とつける上〜

ヤーボルキ ムツカといふ物を拵け〜ヤーボルキハ一

種の草なりムツカを粉のりなり 葉藻の粉の  
詳あす 但上人

の〜かくい〜はなり

梅ふ和菓人も髪ふ白粉をふ〜くは系何物

あ〜る未〜は守〜は彼地方の内海を〜

い〜もあ〜老成の姿を〜を〜を〜

〜を噴嚏 フサメ 出〜るあ〜は〜を〜人 大光スタクストイ  
ダラスケ



いよ 祝するれ 嘸めしむる人ニバミイバといひて謝する  
なより 又ナツドロイヤ ともいふ これ丁寧お辱く  
 はなはだ 梅おこし意味急るす我邦人のしむる  
すれ 己より 人のしむるなよりそ自ら思  
ふを吐くこれと大いにおまを

環海異聞卷之七



